

活動記録

ひょうご歴史研究室（以下、研究室と略す）は、平成二十七年（二〇一五）四月、県民の郷土に対する愛着を深め、「ふるさと意識」に根ざしたひょうご文化の発展・継承をめざし、また県内各地の歴史の調査・研究を目的にして、兵庫県立歴史博物館内に開設された（設置要綱は147頁に掲載）。

研究室の構成メンバーは、博物館長が室長を、次長が副室長を兼務し、そのほか館内外の博物館・資料館の学芸員や職員、市町の文化財担当者、大学研究者、民間団体研究者などに、参与・研究員などとして協力を仰いで成り立っている。

本年度からコア会議メンバーに、昨年度まで文化財課長だった山下史朗兵庫県企画県民部地域創生局参事（歴史資源活用担当）が顧問として加わった。

また本年度から今後の世代交代をすすめるために新たに協力研究員という枠を設け、垣内章・大平茂・村上泰樹の三氏がその任に就いた。

これらの全体を統括するのは、教育委員会事務局文化財課の甲斐昭光課長で、そのもとに本年度は、三名の文化財課職員が、各班の補佐役を担当した（大本朋弥主任、柏原正民副課長兼文化財班長、小川弦太主査）。また昨年度まで補佐役だった永恵裕和主任は、兵庫県立考古博物館の主任として転出し、その立場で赤松氏と山城研究班の研究員として加わった。

また非常勤職員の研究コーディネーター（坂江渉）・歴史研究推進員（大村拓生）・事務スタッフ（長澤喜史県政推進事務員）の各一名を配置し、研究室は現在、総勢三六名で構成されている（148頁の「室構成メンバー一覧」を参照）。

開設初年度、研究の基本方針を討

議するコア会議、全体会議の開催を経て、室の当面の研究テーマを、

①『播磨国風土記』、

②赤松氏と山城、

③たたら製鉄、

の三つにすることが決められた。それを遂行するため、三つの研究班を編成した。

平成二十七年度は、編纂一三〇〇年記念を迎えた『播磨国風土記』研究、二八年度は、赤松氏と山城研究、二九年度は、たたら製鉄研究に集中的に取り組んだ。開設四年目以降は、とくに重点的な研究テーマを立てていない。

ただし平成三〇年度から、研究室の全体方針を掲げ、本年度は、「五年間の研究成果を踏まえ、基礎研究を継続するとともに、島根県古代文化センターとの連携を強化して、ひょうご地域史研究の発展を図る」と決めた。

この方針のもと事業をすすめる予

定であったが、残念ながら新型コロナウイルス禍により、本年度は順調に活動をすすめることができなかった。

第一に、コロナ禍「第一波」段階の年度当初は、各班のフィールド調査活動を抑えざるを得なかった。これによりとくに『播磨国風土記』研究班の調査件数は、昨年度と比較して半減近くになった。

第二に、外部の協力組織である淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの合同事業はほとんどできず、つぎの市民向け企画を中止した。

□令和三年二月七日開催予定

・ひょうご歴史研究室in淡路島IV

(淡路市)

□令和二年十一月二八日開催予定

・ひょうご歴史文化フォーラム

(三木市)

それぞれ関係団体と協議して、かなりの具体案を立てていたが中止、延期とせざるを得なかった。

□国際シンポジウムの開催予定

また令和二年の九月頃、海外の『播磨国風土記』研究の第一人者、エドウィーナ・パーマー氏を招いて開く予定だった国際シンポジウム企画も延期と決めた。

第三に、年度当初に開催予定の第一回コアメンバー会議も対面開催を止めて書面審査とした。それを通じて、コロナ禍のもとでの本年度の具体的方針として、

①コロナ流行がある程度収まった段階で、基礎的な調査研究活動と三つの班の研究会を再開させること、

②その成果を広く発信するため、ホームページの内容を充実し、原則として月二回のペースで「研究員のリレートーク」を継続していくこと、

③新たに「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトを立ち上げ、兵庫県と徳島県が共同ですすめている「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進事業に協力し、二ヶ年の予定で、研究室を母体

とした学術調査に着手すること、

④本年度刊行予定の『ひょうご歴史研究室紀要』第六号の内容は、「播磨の道」という特集を立て、各研究員が執筆のため早めの準備をしていくこと、などの点が決められた。

これらについては、その後ほぼ方針通りに実施することができた。また第二回コアメンバー会議については、感染症対策を講じながら、令和二年一月一九日、館内ホールで開催した。

以下、三つの班の研究活動と研究成果を簡単に紹介する。

なお各班の研究会と調査活動、および「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの活動内容については、145頁の146頁の一覧表を参照のこと（本誌第五号に掲載できなかった昨年度の分も含む）。

一、『播磨国風土記』研究班

(1)体制と研究方針

本年度は昨年度と同様、合わせて一〇名のメンバーで構成された。

第一回研究会で、研究方針を昨年度と同様、「『播磨国風土記』調査研究を持続させるとともに、関係する自治体関係者との信頼関係を確立した上で、広く県内各地の古代史研究にも着手する」とすることが確認された。

ただしコロナ禍のもと、調査活動そのものは、『播磨国風土記』研究、古代の大阪湾岸の海人の実態調査、および特集号「播磨の道」というテーマの『研究室紀要』六号の刊行に向けた準備をすすめる、という三本柱を中心することが決められた。

このうち『播磨国風土記』研究に関して、令和三年度の秋、神戸新聞総合出版センターから『播磨国風土記の古代史』という本を刊行するこ

とが決まった。令和三年四月から、研究班メンバーを中心に、刊行に向けた論文合同研究会をリモート形式で毎月開き、現段階で所収予定の四〇本の論文のうち、半分近くの原稿が集まっている。

本年度の研究成果は、以下のとおりである。

(2)研究成果の公表

①ひょうご歴史研究室in淡路島＋淡路島日本遺産海人の調査研究事業

Ⅲ（昨年度分）

□令和二年二月一日（土）

□洲本市文化体育館大ホール

③「古墳時代の淡路島と大阪湾岸

―海人の生業・習俗・地域間交流―シンポジウム」

□淡路島日本遺産委員会との共催行

事

□参加者は一九〇名

②ふるさとの歴史講座神戸校の歴史講座への協力

前副室長の豊田幸雄氏の紹介で、本年度から公益財団法人・兵庫県芸術文化協会の「令和二年度兵庫県生活文化大学」の歴史講座の開催に、研究室が共催団体として協力することになった。

テーマを「神戸・阪神間の古代史」として、合わせて一〇回の講演会を開く予定であったが、コロナ禍のため計七回の内容に変更された（14頁参照）。毎回の参加者は平均して四〇人程度である。

③本誌での論文執筆

中村弘研究員と坂江涉研究コーディネーターが特集論文を、伊藤宏幸共同研究員が「歴史遺産活用」コーナーに執筆した。

二、赤松氏と山城研究班

(1) 体制と研究方針

昨年度までリーダーの小林基伸客員研究員、本館を定年退職した堀田浩之研究員が退任し、新たにたつの市教育委員会歴史文化財課長の義則敏彦氏が共同研究員、新任の本館技術職員（学芸員）の竹内信氏が加わり、総勢十一名の構成になった。新リーダーには山上雅弘氏が就いた。

昨年度の研究方針に代え、「たつの市と連携して、城山城の構造について古代・中世の両側面から調査研究するとともに、前期赤松氏の動向について幅広く資料収集・分析をはかる」という方針を立てた。

このもとで、城山城の現地調査や表採遺物の整理、赤松氏関連の文献史料調査、赤松居館跡の発掘調査の取りまとめへの協力をおこなった。その成果を、以下の形で公表した。

(2) 研究成果の公表

① たつの市立埋蔵文化財センター特別展「城山城く古代山城と赤松の城」への協力

義則共同研究員が企画・立案した令和三年一月三〇日～三月八日開催の展覧会に協力し、山上共同研究員が図録執筆・講演会をおこなった。

② 『神戸新聞』への取材協力

西播磨の山城に関する連載企画、「とりでの記憶」について、大村拓生歴史研究推進研究員が記者取材に応じ、その談話が令和三年一月四日付け同紙に掲載された。

③ 本誌での論文執筆

大村拓生歴史研究推進員と藤木透共同研究員が、本誌の特集論文に執筆した。

三、たたら製鉄研究班

(1) 体制と研究方針

昨年度と同じ一〇名のメンバー構

成で、調査研究に取り組んだ。

第一回研究会で研究方針を、昨年度と同様、「宍粟市と共同して、考古部門と文献調査部門の基礎的研究をすすめる」とする点が確認された。

この方針のもと、文献史学と考古学の両面から調査に着手した。コロナ禍のもとであったが、文献史料については、天児屋たたら製鉄の墓碑資料調査、考古学の分野では、安積山遺跡とカンカケ遺跡等の資料・フィールド調査をすすめた。また平成三〇年度から本格的に始まった島根県古代文化センターとの連携交流は、本年度はほとんどできなかった。

代わって岡山県教育庁との連携が始まり、第二回研究会で同教育庁文化財課文化財保護班の上樗武主幹による報告を得て、活発な議論をすることができた。

公表した研究成果は、つぎの通りである。

(2) 研究成果の公表

①『紀要』別冊の刊行記念シンポジウムの開催

一昨年度から取り組み始めた本館所蔵の二つの史料群、『宝暦六年鉄山一件』と『播磨宍粟郡鉄山請負御用留』の翻刻作業が完了した。それらの成果を、本誌第三号に掲載した『千草屋手控帳』の翻刻史料と合わせて、令和二年三月に刊行した。

当初、本年度七月に刊行記念シンポジウムを開催する予定であったが延期して、九月一九日に館内で開催した。感染対策を講じたため、参加者は五四名であった。

②本誌での論文執筆

田路正幸共同研究員が、本誌の特集論文に執筆した。またそれに関連して本館友の会の理事、梶本武邦氏に論考執筆を依頼して、「フィールドレポート」コーナーに掲載された。

四、その他

①「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

研究室では新たに本年度から二年を目途にして、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトに取り組みだした。その経緯・主旨・構成メンバー等については、「歴史遺産活用」コーナーの藪田貫館長論文に詳しいが、コロナ禍のもと、ある程度のスピードで調査研究がすすんでいる。

②研究室ホームページ

研究室では、平成二七年の秋、情報発信ツールの一つとして、ホームページを開設した。

催し物の案内のほか、三つの研究班の調査活動や研究成果を取り上げている。

コロナ禍の本年度は、新たに「研究員のリレートーク」をアップし、県民向けの情報発信につとめている。

ことは前述の通りである。令和三年一月二〇日段階で、合わせて一六名が登場し、興味深い話が載せられている。詳細はホームページをご覧ください。

(以上、文責は坂江渉)

ふるさとの歴史講座 神戸校 「神戸・阪神間の古代史」

【会 場】生田文化会館大ホール 神戸市中央区中山手通6丁目1-40（10月・11月・12月）
兵庫県民会館3階 303号室（1月・2月・3月22日）
兵庫県民会館10階 福の間（3月1日）

【時 間】午後2時から3時30分まで（月曜日）

【年間受講料】一般：12,600円 ※友の会会員：9,100円

※県立美術館「芸術の館 友の会」、県立歴史博物館友の会会員も対象

【日程等】

新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から、講座日程および講座内容等を下記のとおり変更して実施させていただきます。

	実 施 日	講 座 内 容	講 師
①	10月5日(月) 生田文化会館 大ホール	律令時代の西摂・東播と人々の暮らし	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター 坂江 渉
②	11月9日(月) 生田文化会館 大ホール	猪名川流域の古代王宮	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学大学院教授) 古市 晃
③	12月7日(月) 生田文化会館 大ホール	「神功皇后」の伝承地 -生田社と長田社-	ひょうご歴史研究室客員研究員 (立命館大学非常勤講師) 高橋 明裕
④	1月18日(月) 3階 303号室	古墳時代の瀬戸内交通 -兵庫県内の港・津-	ひょうご歴史研究室協力研究員 大平 茂
⑤	2月1日(月) 3階 303号室	天皇と有馬温泉	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学大学院教授) 古市 晃
⑥	3月1日(月) 10階 福の間	武庫の山と六甲山	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター 坂江 渉
⑦	3月22日(月) 3階 303号室	江戸の「古代史」 -ルーツに憧れた近世人-	兵庫県立歴史博物館長 兼 ひょうご歴史研究室長 藪田 貴

※ 都合により日程、会場、講師、内容が変更する場合があります。ご了承ください。

【問い合わせ】公益財団法人 兵庫県芸術文化協会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通4-16-3

TEL (078) 321-2002

FAX (078) 321-2139

e-mail: sinkoubu@hyogo-arts.or.jp

令和元年度（承前）～令和２年度 「ひょうご歴史研究室」研究会一覧（敬称略）

コア会議

	日付	場所	内容	人数	備考
①	12／19(土)	館内	若い人材の育成、令和３年度の体制等について	12	

『播磨国風土記』研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	2／1(土)	洲本市	・和田晴吾（兵庫県立考古博物館長） 「漁具からみた大阪湾岸と淡路島の海人」 ・坂江 渉「記紀の「槇根津日子」伝承と大阪湾岸のウミガメ」	190	淡路島日本遺産委員会との合同研究会
①	6／7(日)	館内	・積山 洋「古代大阪湾の漁業と塩業」	17	
②	10／24(土)	館内	・古市 晃「オケ・ヲケ伝承の基礎的考察」 ・中村 弘「古墳時代の播磨の道」 ・坂江 渉「播磨の古道と白鳳寺院」	13	

赤松氏と山城研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	7／26(日)	館内	・大村拓生「前期赤松氏研究の課題－赤松氏庶流の動向をめぐって」 ・山上雅弘「城山城調査について」	16	
②	10／3(土)	館内	・義則敏彦「城山城の遺構・遺物・周辺の遺跡等」 ・山上雅弘「城山城と南北朝～室町期城郭調査」 ・大村拓生「地誌に見える城山城周辺の寺社・城郭の由緒について」	14	

たたら製鉄研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	7／12(日)	館内	・『紀要』別冊「近世播磨のたたら製鉄史料集」の評価	16	
②	9／19(土)	館内	・土佐雅彦「中国山地のたたら製鉄の技術的変遷」 ・笠井今日子「『鉄山請負御用留』の語るたたら製鉄」 ・大槻 守「『鉄山一件』の語るたたら製鉄」	59	『紀要』別冊刊行記念シンポジウム
③	12／19(土)	館内	・上楯 武「古代・中世美作の鉄生産」 ・土佐雅彦「『山方役所勤方覚書』 2史料の翻刻について	13	大槻守、村上泰樹両氏の報告は、時間の関係で延期になった

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	8／29(土)	洲本市文化体育館	第1回「淡路島と鳴門の渦潮」調査研究会	15	
②	12／2(水)	淡路県民局・洲本市・南あわじ市・淡路市	主旨説明及び協力依頼のため各市教育長等を訪問した。	3	
③	12／5(土)	南あわじ市立図書館・福良地区公民館	南あわじ市の津波に関する聞き取り調査	2	
④	12／21(月)～22(日)	沼島	漁法、魚食、漁民の移動に関する聞き取り調査	1	

令和元年度（承前）～令和２年度 「ひょうご歴史研究室」現地調査等一覧

『播磨国風土記』研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	1／29(木)	現地調査	洲本市文化体育館、先山千光寺他	3	
	3／8(日)	資料調査	兵庫県立考古博物館	1	出土遺物の熟覧調査
	3／9(月)	現地調査	辻ヶ内遺跡（上郡町）	1	高田駅家推定地
	3／21(土)	資料調査	三木市史編纂室	1	研究打合せ
①	7／28(火)	資料調査	小野市立好古館、広渡廃寺跡歴史公園	1	
②	8／9(日)	資料調査	大阪府立中央図書館、柏原市立歴史資料館	1	
③	8／30(日)	現地調査	洲本市立淡路文化史料館、由良城城郭石材集積地他	4	
④	9／24(木)	現地調査	登り田遺跡（姫路市）	2	出土遺物の熟覧
⑤	10／16(金)	現地調査	西脇市郷土資料館、野村廃寺跡（西脇市）他	1	
⑥	11／2(月)	現地調査	下畑海神社（垂水区）、久昌寺（須磨区）他	1	
⑦	11／6(金)	資料調査	明石市立文化博物館	1	
⑧	11／18(火)	資料調査	兵庫県立考古博物館	1	研究打合せ
⑨	12／8(火)	現地調査	大野白髭神社（洲本市）、神本寺（南あわじ市）他	2	
⑩	1／12(火)	資料調査	大阪府立中之島図書館	1	

赤松氏と山城研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	2／10(月)	資料調査	上郡町郷土資料館	5	出土土器の精査
①	8／6(木)	現地調査	大通寺（市川町）、法楽寺（神河町）他	1	
②	9／10(木)	現地調査	たつの市立歴史文化資料館、富島神社他	1	
③	9／24(木)	現地調査	小野市立好古館、慶徳寺、堀井城跡他	1	
④	11／5(木)	資料調査	兵庫県立考古博物館、明石市立文化博物館	1	
⑤	11／27(金)	現地調査	たつの市立歴史文化資料館、井関三神社他	1	
⑥	12／25(金)	現地調査	城山城と周辺遺跡	2	

たたら製鉄研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	3／18(木)	資料調査	生野書院（朝来市）、朝来市埋蔵文化財センター	3	
①	10／7(木)	資料調査	宍粟市歴史資料館	6	
②	11／24(火)	現地調査	カンカケ遺跡、小野タタラバ遺跡（宍粟市）	3	

「ひょうご歴史研究室」設置要綱

(設 置)

第1条 兵庫県内の地域の歴史の調査・研究を通じ、県民の郷土の歴史に関する理解をさらに深め、教育、学術及び「ふるさと意識」に根ざしたひょうごの文化の継承・発展に資するため「ひょうご歴史研究室」(以下「研究室」という。)を置く。

(場 所)

第2条 研究室の設置場所は兵庫県立歴史博物館内とする。

(所掌事務)

第3条 研究室は次に掲げる兵庫県の歴史研究に関する業務を行う。

- (1) 兵庫県内の歴史に関する調査・研究に関すること。
- (2) 調査・研究成果の普及に関すること。
- (3) 調査・研究成果の活用に関すること。
- (4) その他兵庫県の歴史研究に関すること。

(組 織)

第4条 兵庫県立歴史博物館長の下に研究室の室長、副室長及びその他所要の職員を置く。

2 室長は兵庫県立歴史博物館長を、副室長は兵庫県立歴史博物館の次長をもって充てる。

(庶 務)

第5条 研究室の運営に係る庶務は兵庫県立歴史博物館において処理する。

(補 則)

第6条 この要綱に定めるもののほか、研究室の運営に関して必要な事項は別に定める。

附 則

この要綱は、平成27年4月1日から施行する。

令和2年度 ひょうご歴史研究室構成メンバー一覧

(敬称略)

【ひょうご歴史研究室コア会議メンバー】(12名)

室 長	藪 田 貫	兵庫県立歴史博物館 館長
副 室 長	筆 保 慶	兵庫県立歴史博物館 次長
参 与	中 元 孝	播磨学研究所名誉所長、兵庫県立大学特任教授
顧 問	山下 史朗	兵庫県企画県民部地域創生局参事(歴史資源活用担当)
研究コーディネーター	坂 江 渉	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
歴史研究推進員	大 村 拓生	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
共同研究員	大 谷 輝彦	姫路市教育委員会文化財課 課長 [2年目から]
共同研究員	山上 雅弘	兵庫県まちづくり技術センター 技術専門員
協力研究員	村 上 泰樹	元兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 次長
研 究 員	中 村 弘	兵庫県立考古博物館 学芸課長 [4年目から]
県教委事務局	甲 斐 昭光	兵庫県教育委員会事務局文化財課 課長
☆ 県教委事務局	柏 原 正民	兵庫県教育委員会事務局文化財課 副課長兼文化財班長

【『播磨国風土記』研究班】(10名)

◎ 研究コーディネーター	坂 江 渉	再掲
客員研究員	古 市 晃	神戸大学大学院人文学研究科 教授
客員研究員	高 橋 明裕	立命館大学文学部 非常勤講師
共同研究員	大 谷 輝彦	再掲
共同研究員	伊 藤 宏幸	淡路市教育委員会文化財活用等担当部長 [5年目から]
研 究 員	神 戸 佳文	兵庫県立歴史博物館 社会教育推進専門員
研 究 員	中 村 弘	再掲
協力研究員	垣 内 章	播磨学研究所 研究員 [2年目から]
協力研究員	大 平 茂	元三木市立金物資料館館長
☆ 県教委事務局	大 本 朋弥	兵庫県教育委員会事務局文化財課 主任

【赤松氏と山城研究班】(11名)

◎ 共同研究員	山 上 雅弘	再掲
共同研究員	田 村 正孝	大手前大学史学研究所 研究員 [3年目から]
共同研究員	中 井 淳	兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科 教授 [4年目から]
共同研究員	藤 木 透	佐用町教育委員会教育課企画総務室 副室長
共同研究員	大 谷 輝彦	再掲
共同研究員	島 田 拓彦	上郡町教育委員会教育総務課総務・文化財係 学芸員 [2年目から]
☆ 共同研究員	義 則 敏彦	たつの市教育委員会歴史文化財課 課長
研 究 員	永 惠 裕和	兵庫県立考古博物館 主任
☆ 研 究 員	竹 内 信	兵庫県立歴史博物館技術職員(学芸員)
歴史研究推進員	大 村 拓生	再掲
☆ 県教委事務局	柏 原 正民	再掲

【たたら製鉄研究班】(10名)

◎ 協力研究員	村 上 泰樹	再掲
客員研究員	大 槻 守	香寺町史研究室主宰
客員研究員	岩 城 卓二	京都大学人文科学研究所 教授 [4年目から]
客員研究員	土 佐 雅彦	前兵庫県立篠山東雲高等学校教諭 [3年目から]
共同研究員	藤 田 淳	兵庫陶芸美術館 所長補佐兼学芸課長 [2年目から]
共同研究員	伏 谷 聡	兵庫県企画県民部管理局文書課文書管理班 会計年度任用職員
共同研究員	田 路 正幸	宍粟市教育委員会社会教育文化財課 専門員
共同研究員	笠 井 今日子	西宮市立郷土資料館 学芸員 [2年目から]
研 究 員	吉 原 大志	兵庫県立歴史博物館 主任(学芸員) [4年目から]
県教委事務局	小 川 弦太	兵庫県教育委員会事務局文化財課 主査 [3年目から]

県政推進員 長 澤 喜 史

兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室

※ ☆新メンバー、◎リーダー

【「淡路島と鳴門の渦潮」調査研究チーム】（9名）

座 長 委 員	敷 田 貫	ひょうご歴史研究室長
	坂 江 渉	ひょうご歴史研究室研究コーディネーター
	古 市 晃	ひょうご歴史研究室客員研究員
	大 村 拓 生	ひょうご歴史研究室歴史研究推進員
	山 上 雅 弘	ひょうご歴史研究室共同研究員
	木 村 修 二	神戸大学大学院人文科学研究科特命講師
	福 家 清 司	徳島県埋蔵文化財センター理事長
	磯 本 宏 紀	徳島県立博物館学芸員
オブザーバー	山 下 史 朗	兵庫県企画県民部地域創生局参事(歴史資源活用担当)
	「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会	
臨時職員	福 永 明 子	

執筆者紹介

- ・ 藪田 貫 (やぶた・ゆたか)
ひょうご歴史研究室長
- ・ 禰宜田 佳男 (ねぎた・よしお)
大阪府立弥生文化博物館長
- ・ 中村 弘 (なかむら・ひろし)
兵庫県立考古博物館学芸課長
- ・ 坂江 渉 (さかえ・わたる)
ひょうご歴史研究室研究コーディネーター
- ・ 大村 拓生 (おおむら・たくお)
ひょうご歴史研究室歴史研究推進員
- ・ 大國 正美 (おおくに・まさみ)
神戸新聞社取締役企画総務局長
- ・ 池田 征弘 (いけだ・まさひろ)
神戸深江生活文化史料館長
- ・ 田路 正幸 (とうじ・まさゆき)
兵庫県立考古博物館事業部学芸課主査
- ・ 藤本 透 (ふじき・とおる)
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・ 伊藤 宏幸 (いとう・ひろゆき)
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・ 梶本 武邦 (かじもと・たけくに)
兵庫県立歴史博物館友の会理事

編集後記

ひょうご歴史研究室も、コロナ禍により六月まで研究会を実施できず、秋以降も例年開催してきた市民向けの成果発表会は一度のみでした。それでも七月からは研究会・現地調査を再開し、HP上で研究員のリレートークも始めました。

本紀要も研究室メンバーと交流のあった外部の方々のご協力も得て、特集「播磨の道」として論文五篇・研究ノート三篇を掲載することができました。また歴史遺産活用として、今年度からの新規事業である「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト・『播磨国風土記』研究班が協力してきた淡路島日本遺産事業について紹介し、フィールドレポートは、たたら製鉄研究班の活動が一つのきっかけになったものです。

まだまだ予断を許さない状況ですが、工夫を重ねてさまざまな活動に取り組んでゆきたいと考えていますので、引き続きのご支援を心よりお願いする次第です。
(大村拓生)

ひょうご歴史研究室紀要 第六号

令和三年(二〇二一)三月二十六日発行

編集・発行 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室

(編集担当・坂江渉、大村拓生、長澤喜史)

〒六七〇〇〇二二 兵庫県姫路市本町六八番地

電話 〇七九二二八八九〇一一

HP <https://rekihaku.pref.hyo.go.jp/>

印刷 刷 合名会社 柳生印刷所

〒六七一一五六一 兵庫県揖保郡太子町鰯五六八
電話 〇七九二二七六〇〇四八